

独思録：「鳩の乱」(6/21)

小西 秀俊

[esq-info@esquare-kamakura.net](mailto:esq-info@esquare-kamakura.net)

宮原晃一郎に「鳩の鳴く時計」という童話があります。話は、  
「一時間ごと、三十分ごとに、時計の上の方にある小さな戸を押し開いて、赤いくちばしをした鳩（はと）が顔を出して、時間の数だけポウポウとなく時計のあることは、みなさん御存じでせうね。わたしが今こゝにお話しようといふのは、この時計のことで。

あるりつばなお家（うち）の応接間に、この鳩のなく時計がかゝつてみました。こゝの御主人がもう二十幾年前にスヰツツルに旅行をしたときお土産に買って帰つたものでした。そのじぶんには、かういふ時計は、日本にはまだごくごく僅（わづ）かばかりより来てみながつたので、はじめこれを見た人はたいへん珍らしがつて、又非常にたくみな仕掛けになつてゐると感心するのでした。とりわけ子供たちは、この時計がすきですきでたまらないのでした。」

という行で始まり、

「あれはお年をたべるの。ちつとづつ、ちつとづつ、おまいのお年も喰（く）ひへらしてゐるの。」

とからかわれ、十一時に、ポウポウと鳩時計が鳴き始めた時に、いきなりステツキで叩き続け、

「ばか、僕のお年なんかたべるんぢやない、ばか、ばか。」

と鳩時計を壊してしまい、

「いまに、「あゝ、小さいときつて馬鹿なことをしたな。あの時計をこはさずに置いたら、今でも、一時間毎に、三十分ごとに、ポウポウといふやさしい、鳩の鳴く声が聞えたものを」と、後悔するときに来ませう。」

と結んでいます。

しかし、わたしが今こゝにお話しようという鳩時計は、政界の鳩時計で、  
「毎日午後7時のニュースの冒頭に、テレビの画面を通して顔を出し、「正義」「正義」と啼く時計があったことは、皆さんご存知ですね。この時計のことで、鳩のことで。」

この鳩時計の鳩は

「西川郵政社長は国民の財産をたべるの。巨費を投じて建てたカンポの宿を、出来レースで、喰ひへらしてゐるの。」「ばか、国民の財産なんかたべるんぢやない、ばか、ばか。」と啼き続け、取り付く島も無い有様です。そこで首相もしかたなく、党内の首相降ろしを避けるため、この鳩時計を柱から外した次第です。

しかし、この鳩時計の鳩を辞任に追い込んだ首相の支持率、内閣支持率は急落し、とうとうマスコミの世論調査では揃って10%台に突入し、千葉市市長選挙で、31歳の市長を生み出し、民主党が4月以降、名古屋、さいたまに続く政令市長選3連勝するチェンジを演出しています。

「今、「あゝ、迷っているときつて馬鹿なことをするな。もっと前にあの鳩時計の鳩と郵政社長を喧嘩両成敗として決断しておいたら、内閣支持率が20%台に留まっているよというやさしい、国民世論の声が聞えたものを」と、後悔するときにもう来てしまいました。」と、折角、西松建設事件により、一時復調気味であった内閣支持率でしたが、今回の調査結果に至った原因が、日本郵政の社長人事問題をめぐる鳩山邦夫総務相の辞任にあるとされ、本質的には、麻生首相による衆院解散の先送りの結果であり、今後いたずらに時間を稼いでも、袋小路が待っているだけです。

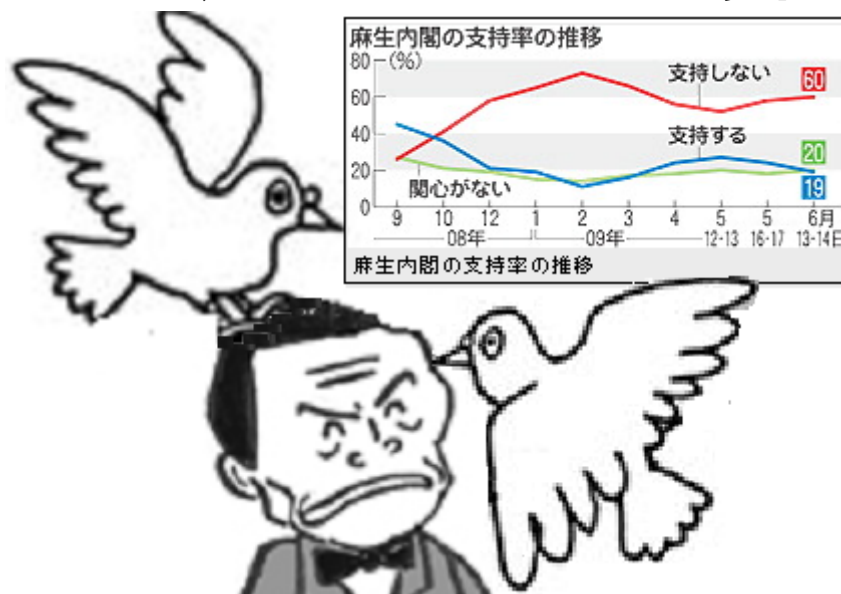
産経：「首相を襲う2羽のハト 鳩山代表が弟にエール」(6/6)

「永田町で2羽のハトが麻生太郎首相をつついているようで…」

民主党の鳩山由紀夫代表は6日昼、遊説先の広島市での講演で、弟の鳩山邦夫総務相が日本郵政の西川善文社長の続投を阻止しようとしている問題に触れた。

自らは「正攻法で戦いを挑んでいる」とする一方、邦夫氏の言動について「もう1羽は、中から内臓をえぐり取るような戦いをしている。それを『ハトの乱』と言うらしい」と命名した。

また、呉市では記者団に対し「閣内不一致で苦闘しているのであれば、早く大臣を辞め、新しい道を進んだらいかがか」と、かつて民主党結党などで手を携えた実弟との“共闘”にも期待感をにじませたが、「まだそこまで思いはいたっていないようだ」とも。



毎日社説：「自民党 選挙前この有り様では」(6/15)

衆院選を間近にしての窮状である。毎日新聞の世論調査で、麻生内閣の支持率は前回より5ポイント減の19%となり、再び1割台に落ち込んだ。14日投票の千葉市長選では民主党推薦の31歳の新人が自民、公明推薦の前副市長に圧勝、与党は地方組織の支持も含めると、名古屋、さいたまに続き政令市長選3連敗となった。

西松建設事件による民主党の混乱後、内閣支持率は一時復調気味だっただけに、与党、とりわけ自民党に冷や水を浴びせる調査結果である。だが、そもそもこの状況に至ったのは麻生太郎首相による衆院解散の先送りの結果であり、いたずらに時間を稼いでも、袋小路にはまるだけではないか。一日も早く政権公約を国民に示すことが、自民党に課せられた危機対処の方策である。

今回、支持率下降の一因になったとみられるのが、日本郵政の社長人事問題をめぐる鳩山邦夫総務相の更迭だ。首相判断を7割近くが「評価しない」と答えた。内閣不支持の理由に首相の指導力不足を挙げる人は39%にのぼり、前回より13ポイント増えた。更迭の結論のみならず、手をこまねいて事態を深刻化させた首相のリーダーシップへの批判だろう。〈後略〉



(読売新聞)

<宮原晃一郎 (1882-1945)>

鹿児島県出身。本名は知久。

1908年、小樽新聞記者をしている時に文部省の新体詩懸賞に「海の子」という詩で応募し佳作当選。これが、1914年の「尋常小学唱歌」(第六学年用)に登場、以後、1943年の「初等科音楽四」まで国定教科書に載り文部省唱歌となった。



しかし、本来歌詞は7番まであったが、戦後は3番までとなり、また国語学者で小学唱歌作詞委員長を務めた芳賀矢一が作者という説もある。

### 春秋：「若い人が夢を失う時代」(6/17)

伊藤博文は 27 歳、山縣有朋が 30 歳、板垣退助も 31 歳、幕臣の榎本武揚でさえ 32 歳。幕末明治に活躍した人々の維新のときの満年齢だ。夜明けを待たず、安政の大獄で非業の死を遂げた吉田松陰は享年 29 歳、橋本左内はなんと 25 歳である。

寿命の短い時代とはいえ、この国に近代をもたらしたのはこれほどに若い力だった。そんな歴史を顧みれば、政令市にまだ青年の面影が残る首長が誕生したのもそう不思議ではない。千葉市長に当選した熊谷俊人氏は 31 歳。勝てる条件がそろっていたにせよ、あまたの有権者がその若さに希望を託したに違いない。

「要らない事業を一から洗い出す」と新市長は野心的だが、さて同じ世代の若者たちはどうだろう。何ごとも高望みせずほどほどで満足する「草食系男子」が目立つらしい。そういうライフスタイルも悪くはないが、こと政治に対しても淡泊なのはちょっと困る。ただでさえ年配者の声が大きく響く世の中なのだ。

年金問題ひとつとっても未来が描けないから若い人が夢を失う。意欲をなくした若者が増えればますます明日が見えなくなる。そんな悪循環ではどうしようもないから、かの市長など大いに若手の刺激になるといい。旧弊に抗（あらが）ってシニアを怒らせようと、まさか安政の大獄のような弾圧もないはずだ。草食系諸君。

#### < 伊藤博文 (1841-1909) >

初代内閣総理大臣。

大日本帝国憲法の起草に関わり、初代・第 5 代・第 7 代・第 10 代の内閣総理大臣および初代枢密院議長・韓国統監府統監・貴族院議長・兵庫県知事（官選）を務めた。

立憲政友会を結成・初代総裁。

アジア最初の立憲体制の生みの親であり、またその立憲体制の上で政治家として活躍した最初の議会政治家として評価され、「明治の元勳」と呼ばれる。

#### < 山縣有朋 (1838-1922) >

第 3 代内閣総理大臣。

高杉晋作が創設した奇兵隊に入って頭角を現し、軍監。明治新政府では軍政家として手腕をふるい日本陸軍の基礎を築いて「国軍の父」とも称される。

官僚制度の確立にも精力を傾け、文官試験制度を創設。

晩年も陸軍のみならず政官界の「元老中の元老」として隠然たる影響力を保ち、「日本軍閥の祖」の異名をもつ。

#### < 板垣退助 (1837-1919) >

政治家。

自由民権運動の主導者として知られ、生存時、一般庶民から圧倒的な支持を受け、また、

没後も、日本の民主政治の草分けとして人気が高い

1881年、帝国議会を開設するという国会開設の詔が出されたのを機に、自由党を結成して党首。全国を遊説してまわり、1882年、岐阜で遊説中に暴漢・相原尚褰に襲われ負傷した（岐阜事件）。その際、「板垣死すとも自由は死せず」と叫んだのは有名。

< 榎本武揚（1836-1908） >

政治家。徳川育英会育英覺農業科（東京農業大学の前身）の創設者。

1856年幕府が新設した長崎海軍伝習所に入所、1862年から1867年までオランダに留学。

大政奉還後、新政府軍が江戸城を無血開城すると、抗戦派の旧幕臣とともに8艦から成る旧幕府艦隊を率いて脱出、箱館の五稜郭に拠り、新政府軍と戦うが降伏。1872年特赦出獄、その才能を買われて新政府に登用され、内閣制度の成立後は6度の内閣で連続して、逓信大臣、文部大臣、外務大臣、農商務大臣を歴任。

< 吉田松陰（1830-1859） >

思想家、教育者、兵学者。明治維新の精神的指導者・理論者と云われている。

1854年に浦賀に再来航していたペリーの艦隊に対してアメリカ密航を望んだが、拒絶され、長州の野山獄に送られ、1855年に出獄を許されると、松下村塾を開塾、久坂玄瑞や伊藤博文などを教育。

1858年幕府が無勅許で日米修好通商条約の締結に対し、老中首座の間部詮勝暗殺を計画、再び、野山獄に送られ、安政の大獄で江戸の伝馬町牢屋敷に送られ、1859年斬刑。

< 橋本左内（1834-1859） >

幕末期の越前国福井藩士。足利一門のひとつ、桃井氏後裔。

越前国に生まれる。1849年、大坂に出て適塾で緒方洪庵・杉田成卿に師事し蘭方医学を学んだ後、藤田東湖、西郷隆盛、梅田雲浜、横井小楠らと交遊。

越前・福井藩士の松平春嶽（慶永）に側近として登用され、1857年以降、幕政改革に参加。

1859年春嶽が隠居謹慎処分命ぜられた後、安政の大獄で將軍継嗣問題に介入した事が問われ小塚原刑場にて斬首。



< 安政の大獄 >

安政 5 年（1858 年）から翌年にかけて江戸幕府が行なった弾圧。

幕府の大老井伊直弼や老中間部詮勝の幕閣が、勅許を得ないまま日米修好通商条約に調印し、また徳川家茂を将軍継嗣に決定した。

安政の大獄とは、これらの諸策に反対する者たちを弾圧した事件である。弾圧されたのは尊皇攘夷や一橋派の大名・公卿・志士（活動家）らで、連座した者は 100 人以上にのぼった。なお、形としては第 13 代将軍・徳川家定が「台命」（たいめい=将軍の命令）を発して本項で述べる全ての処罰を行なったことになっている。そうでもしなければ譜代大名に過ぎない井伊直弼が自分の目上に当たる朝廷・徳川一門を処罰することはできなかった。

結果、安政 7 年 3 月 3 日（1860 年 3 月 24 日）、江戸城桜田門外（東京都千代田区）において大老・井伊直弼の行列が水戸藩の浪士らによって襲撃を受け、暗殺された。（桜田門外の変）



## 天声人語：「政治案件」(6/16)

明治の初めに東京や横浜に設けられた郵便箱（ポスト）は黒塗りだった。「郵便」という言葉が珍しく、「たれべん」と読み違えた人が立ち小便を放ったというのは本当のことか。138年前に郵便制度が始まったころの話である。

制度をつくった前島密（ひそか）は無私な人だったらしい。事業を軌道に乗せて官界を去るとき、知人らは「もう少しで恩給をもらう資格ができる」と止めた。しかし前島は笑って身を引いた。淡々とした人柄が、古い遺稿集『郵便創業談』からうかがえる。

その清廉の人が、さぞや嘆いているだろう。障害者向けの郵便割引制度が悪用された事件は、厚生労働省の局長の逮捕に発展した。障害者団体の実態がない組織に、偽造の「お墨付き」を与えていた疑いだという。

看板に偽りありを「羊頭狗肉（ようとうくにく）」と言う。不正は、いかがわしい団体に中身をごまかす羊の頭を与えたようなものだ。局長は否認しているそうだが、ならば誰の意思と行為が不正を生んだのか。

「政治案件」という言葉が、またぞろ聞こえてくる。官界の用語で、政治家の口添えのある頼まれ事の意味だ。最も憂うべきは、誰にも犯意のないまま偽造証明書が作られた場合だろう。それは政と官のなれ合いから、役所という組織そのものが産み落とした不正にほかならない。

局長は文字通りのキャリアウーマンで、舛添厚労相は「働く女性にとって希望の星だった」と言う。残念ながら、すでに過去形である。このまま事が進むなら、前島と違って後味の悪い、志半ばでの挫折ということになる。

< 前島密 (1835-1919) >

官僚、政治家。日本の近代郵便制度の創設者。越後国頸城郡津有村下池部（現在の新潟県上越市）生まれ。

「郵便」や「切手」、「葉書」という名称を定め「郵便制度の父」と呼ばれる。



1847年江戸に出て医学を修め、蘭学・英語・航海術を学び、薩摩藩の洋学校（開成所）の蘭学講師を経て、幕臣前島家の養子となり、家督を継いで前島来輔と名乗る。

1869年明治政府の招聘により、民部省・大蔵省に出仕、租税権正・駅逋権正兼任となり、太政官に郵便制度創設を建議、郵便制度視察および鉄道建設借款契約締結のため渡英、帰国後、駅逋頭に任じられ、郵便制度創設に尽力、日本の近代的郵便制度の基礎を確立した。

大久保利通らが当初進めていた大阪遷都に対し江戸遷都を建白した事でも知られる。

### 編集手帳：「麻生首相のぼやき」(6/17)

浮気心と、妻に濟まないと思う心のはざままで男は疲れ、ひとりつぶやく。「私の生活は、良心と欲望が互いにしのぎを削っている時間が多すぎる。いずれが勝っても、敗者は私なのだ」。

ディック・フランシスの競馬ミステリー「罰金」(早川書房)の一節だが、麻生首相のぼやきを聞くようでもある。日本郵政の社長人事を巡って鳩山邦夫前総務相を更迭したことが痛手となり、内閣支持率が急落した。

国民の共有財産を二束三文で叩(たた)き売ろうとした不祥事に、きちんと筋を通すのは為政者の「良心」である。筋を通せば、しかし、党内が騒ぎ出す。“反・麻生”の動きを封じたい「欲望」に首相は負けたと、世間の目には映ったのだろう。

鳩山氏に味方して西川善文社長の経営責任を厳しく問えば、党内の“麻生降ろし”に足を引っ張られる。鳩山氏を切れば切ったで、世論に足を引っ張られる。どっちに転んでも敗者は私としても、「良心」に殉じるほうがまだしも救いがあった。

選挙を前に、堂々、世論の逆を張る。人物の器が大きいのか、並の器で空洞だけが大きいのか、この人ばかりは分からない。

<ディック・フランシス(1920-)>

イギリスの小説家、障害競走の元騎手。英国推理作家協会元会長。本名はリチャード・スタンレー・フランシス。

ウェールズで生まれ、1953年から1954年のシーズンでイギリスの障害競馬においてリーディングジョッキー。

1953年から1957年にかけてクイーンマザー(エリザベス王太后)の専属騎手。

1957年に騎手を引退したのち、新聞記者、そして作家となり推理小説を執筆してCWA賞やエドガー賞長編賞を受賞。

作品に『1962年本命』『度胸』『興奮』『大穴』『飛越』『血統』『罰金』などの競馬関連を中心に多数。



### 発信箱：「政権担当能力」(6/18)

政権交代が現実味を帯びて語られ始めたからだろう。「で、民主党には政権担当能力があると思うか」と質問を受ける機会が増えた。私はこう答えるようにしている。

「結局は、やってみないことには分からない」

無責任に聞こえるかもしれないが、実際、未知数なのだから、それが一番誠実な答え方だと思う。ブラックボックスのような予算書などを分析し、無駄遣いをあぶり出す力は今の与党議員より数段上だと考えるが、それだけで政権を担えるわけではない。不安は多々ある。

ただし、この議論をする際には同時に「では今の自民党に政権担当能力があるのか」と問い直すことも必要だ。

首相が簡単に政権を投げ出して、ころころ代わる。麻生太郎首相で次の衆院選を戦うかどうか、党内では再び「麻生降ろし」が真顔で語られている。しかも、国民のためでなく自分の選挙のためだ。

鳩山邦夫前総務相の辞任に至った西川善文日本郵政社長の進退問題は首相の決断力と統治能力の欠如をさらけ出した。消費税率をどうする、社会保障費はどうするという問題では、個々の議員が好き勝手に発言し、もはや学級崩壊のような様相である。

それでもこれまでの実績を重んじるか。未知数だけれど「一度、政権を交代させてみよう」と考えるか。次の総選挙はそんな選択となる。もちろん、自民、民主以外の他党が増えた方がいいという人もいるだろう。

私たち有権者は、もう「政治家にお任せ」ではいられない。責任はより重大。というより、政治の行く道を自分たちが決めるのだから「こんなにワクワクする話はない」と考えることにしましょう。

< 西川善文 (1938-) >

三井住友銀行元頭取。初代日本郵政代表取締役社長。

奈良生まれ。大阪大学法学部卒。住友銀行入行。

頭取時代に中小企業への融資の際に融資と抱き合わせでデリバティブ商品(リスク商品)を販売、金融庁から一部業務停止命令の行政処分を受けた。



2005年度3月期決算が赤字に下方修正された経営責任を取って頭取の職を退任。

2006年、郵政民営化で発足した日本郵政の初代社長に就任。日本郵政社長就任には竹中の強い意向があったとされる。